

## プロポーズ

嬉しいことに、佐伯が用意した箱根の宿を、権藤と小枝子は堪能したようだった。熊田の事件のせいで一週間延期になっていた。熊田事件が穏便に片付いたこともあって、佐伯にとっても、箱根旅行は、よい休養となった。プライベートな場所で見ると、権藤親子は本当に仲むつまじい。小枝子は一時、父に反発したこともあったようだが、自分が社会に出てみて、父の苦勞が分かったと言っている。今では、権藤のよき理解者だ。

そして、箱根の旅をきっかけに佐伯と小枝子の仲はぐんと接近した。いつものスーツ姿を脱ぎ捨てて、ラフな格好で話をしてみると、小枝子がとても身近な存在に思えた。

その後も、佐伯は、小枝子とテニスデートを重ねていた。小枝子の上達ぶりはすさまじく、佐伯が油断していると、ゲームを落とすこともあるくらいになっていた。もちろん、女性相手であるから、佐伯はサーブを全力では打たずに、コントロールしていた。しかし、下手に緩いサーブを打つと、リターンをエースにされる。

「佐伯さん手加減しないでね」

と、小枝子は挑戦的に言った。

しかし、佐伯がたまに速いサーブを打つと

「女の子なんだから、気を使って」

と矛盾したことも平気で言う。

最近、佐伯は、小枝子と居ることに心地よさを感じていた。出会ってすぐの頃は、どちらかというが高嶺の花というイメージが強すぎて、会って話をしても何か遠慮がちになる自分を感じていた。しかし、箱根の旅行やテニスなどを通して打ちとけあってくると、小枝子には女性らしい可愛らしさがあることも分かってきた。年が離れているせいもあるが、どちらかという妹的な存在となっている。

何でも達観していて、才能あふれるように見える小枝子も、いろいろな悩みを抱えているということも、佐伯は理解するようになっていた。勉強もでき、スポーツもできるスーパーウーマンと思っていたが、外から、そう見られるだけに気苦勞も多いのであろう。小枝子も、佐伯のまえでは、よろいを脱いで、やんちゃな少女に戻った。

小枝子は、どうしても異性からだけでなく、同性からも妬まれる。

しかし、佐伯は

「そう思われるのは、小枝子さんがそれだけ才能に恵まれているという証拠だと思わなければいけないよ」

と諭した。これは、佐伯の本心なのだが、小枝子も、佐伯からそういわれると、陰口を叩かれて、落ち込んでいる時でも、すぐに立ち直れるのだった。

テニスの後、佐伯は、東京湾が一望できるレストランに、小枝子を食事に誘った。もち

ろん、全席禁煙である。

「こんなところで、食事をしていると別世界にいるみたい」

と、小枝子は感激した。

「権藤社長ならば、こんな店はいつでも来られるのではないですか」

「父に余裕ができたのは、役所を辞めてからなの。それまでは、接待は別にして、家族を、こんな素敵なレストランに連れてくる財力なんかなかったわ」

佐伯は、そんなものかと思った。よく、テレビや新聞で登場する役人の遊興三昧な日常を聞くと、役人は、いつでも高級レストランで飲み食いしているものと思っていたが、プライベートに使える金は、それほどないということだろうか。それとも、権藤は、立派な役人だったから、自分たちのプライベートな出費を業者などに回さなかったということかもしれない。

「最近、大学の方はどうですか。」

「相変わらずよ。陰口ばかりで嫌になっちゃう。でも、佐伯さんの言葉で救われたわ。出る杭は打たれるということよね」

「そうです。前向きに考えなきゃ」

「でも、なんか佐伯さんと、こんな風に話していると、普段の嫌なことを忘れてしまう」

「それは、ありがとう」

「ところで、どうなの、会社の方は。父が引退した後の体制づくりは、着々と進んでいるんですか」

「権藤社長がみずから陣頭指揮に立っていますからね。今からでも、遅くない。社長には、ぜひもう一期務めてほしい。それが、僕の本音です」

「そんな風に、部下から言われるなんて、父も幸せね。だけど、そう思われているうちに引退したほうが良いのかも。どんなに立派な人間でも引き際を間違えるってことはよくあるでしょう」

「そうですね。政治家にもよくいますね、未練たらしくポストにしがみつこうとしている人たち」

「どの社会でも同じじゃないかしら」

「大学はどうですか。」

「大学でもそうよ。早期退職制度を導入した学長が、なんと学長の定年制を廃止したの。」

「それは、おかしな話ですね」

「能力のある人間は、定年で大学を去るのはもったいないという理屈らしいけど、ばかばかしくて相手にもならないわ」

「その点、地位に恋々としなない社長は立派ですね」

「でも、世の中はそう簡単ではないわ。父がやめられるのも、利害関係のある人が少ないからでしょう。政治家だって、やめたくてもやめられない場合もあるんじゃないかしら」

「それはどういうことですか」

「政治家を支持する連中は、人間として支持しているというよりも、自分たちに利益誘導してくれる存在だから支持するという理由の方が大きいでしょう。とすると、支持していた政治家に辞められると、自分たちの既得権益が失われることになるわ。だから、本人の意思に関係なく、まわりが辞めさせないように圧力をかけるということよ」

「なるほどね。それはあるかもしれない。議員に世襲制が多いというのも、この権益と関係しているのしょうね」

と佐伯は納得した。

「ところで、小枝子さんは将来どうするお積りですか」

「佐伯さん。突然、話題を変えてどうしたの」

「いえ、ただ、なんとなく、小枝子さんの気持ちを聞きたかったものですから」

「ふーん」

と言って、小枝子はちゃめつけたつぷりに佐伯を見た。

「佐伯さんの奥さんになっちゃおうかな」

いつもの佐伯なら、ここで、飲み物を吐き出すのだが、今夜は違った。

「冗談ではなく、そうしませんか」

と、真剣な顔で、小枝子に迫った。

最初は、笑いでごまかしていた小枝子だが、佐伯が、真面目な様子なので、少し驚いたようだ。

「佐伯さん。それってプロポーズなの？」

「ええ、そう考えていただいて結構です」

今度は、小枝子が真剣な顔になった。

「それは、嬉しいけど、わたしは、結構おばさんですよ。佐伯さんなら、いくらでも若い子がいるでしょう」

「小枝子さん。冗談はよしてください。わたしだって、もう、四十七ですよ。プロポーズするのだから恥ずかしいくらいです」

しばらく、ふたりは黙っていたが、どちらからともなく笑ってしまった。

「やっぱり、まじめにこんな話をするのは恥ずかしいですね」

と佐伯は言った。

「あらやだ。わたしは、そう思っていませんよ。どちらかという喜んでいただけなのに」

「えっ、そうだったんですか？」

小枝子は、恥ずかしそうにうなずいた。

「じゃ。真剣に聞きます。小枝子さん、わたしと結婚していただいけませんか？」

小枝子は、しばらく考えていたが

「佐伯さん、ありがとう。喜んで」

と言ってくれた。そして、ふたりはワインで乾杯した。東京湾を見下ろすと、ちょうどベイクルーズの豪華客船が、外洋から戻ってくるころだった。佐伯は、あらためて驚いて

いた。自分に、こんな勇気があったのだ。そして、小枝子が自分のプロポーズを受けてくれたことにも感謝していた。実は、半分以上の確率で断られると思っていたからである。

。

## タバコ増税

政府は、正式にタバコの税金を一本あたり一円値上げすると発表した。佐伯はほっとしていた。確かに、増税は痛い、この程度であれば、さほど売り上げには響かないだろう。何しろ、喫煙者は、タバコが吸いたくて仕方がないのだ。少々の値上げで、禁煙するくらいなら、最初から、タバコなど吸っていないであろう。

「品川君、今回はこの程度ですんだが、これからどうなるかは分からない。心して掛かってくれ。」

「はい、社長の言わんとするところは承知しております」

最近、品川は、権藤の指針こそがN T Sとして、進むべき道と考えるようになっている。喫煙者と非喫煙者が共存できる社会。特に、非喫煙者が喫煙を不快と感じないような社会の実現。これが、N T Sのめざすべき方向である。

現在、タバコを増税しろと騒いでいるのは、喫煙によって多額の医療費がかかっているということが背景にある。これは、非喫煙者が間接喫煙によって被害を蒙った分も含まれている。だからこそ、間接喫煙の危険性を排除する。これが、まず重要である。

タバコに対する非難が高まる理由は、ニコチン中毒ではない非喫煙者に迷惑がかかるからだ。それが、無くなれば、タバコ批判はかなり鎮静化するだろう。

さらに、表立っては宣伝できないが、タバコには医療費軽減で重要な効果がある。それは、平均寿命を低下させるという効果である。喫煙者が、自由にタバコを吸うようになれば、当然、早死にするものも増えるであろう。もちろん、その治療に要する医療費はかかるかもしれないが、それ以上に早世してくれる効果は大きいはずだ。

つまり、喫煙者と非喫煙者が、互いに自由を謳歌できる社会をつくれれば、それは、別の意味でも好ましい社会ということになる。もちろん、N T Sも安泰となる。

品川は、佐伯を見ていった。

「佐伯君、今度、結婚するらしいね。おめでとう。しかも、その相手が権藤社長のお嬢さんというから、二重の喜びだ」

権藤は

「レイムダックの娘と結婚しても、佐伯君にとっては意味がないかもしれないがね」と自嘲ぎみに言った。佐伯はむきになって

「社長。これは、政略結婚ではありません。わたしが小枝子さんを気に入ったから、結婚を申し込んだんです」

すると、権藤は

「あっはは。やはり、小枝子が言うように佐伯君はからかいがいがいるね。冗談を真にう

けてくれるからな」

と笑っている。品川もつられるように笑った。

## 華燭の典

佐伯健二と権藤小枝子の結婚披露宴は盛大に行われた。ふたりは、質素な披露宴をしたいと申し出たが、まわりが許さなかった。何しろ、いまや、佐伯は、NTSの常務である。しかも、岳父は、財産省の元事務次官。その係累だけでも、かなりの重要人物が集まる。さらに、新婦の小枝子は、大学教授である。その関係者の数も生半可ではない。

結婚式には、吉田良治、亜美夫妻もかけつけてくれた。亜美は、女子を産んだ。母子共に、健康であり、もうすぐNTSに復帰する予定である。佐伯と小枝子のたつての願いで、式にはふたりの子供も列席した。もちろん、披露宴会場は、完全禁煙である。NTS社員の結婚式が禁煙では格好がつかないという会社関係者もいたが、非喫煙者に迷惑をかけない。それが、品川、佐伯新体制のNTSのモットーである。

仲人は、NTS社長の品川夫妻がつとめた。佐伯の親族は恐縮している。かつて、煙塩販売公社の時代は、世話になったが、NTSになってからは関係がない。タバコ栽培もやめていた。それに、新婦側の来賓の顔ぶれが凄すぎる。財産省の幹部や、大学関係者など、普段はお目にかかれないような列席者であふれていた。

なんと、余興では吉田夫妻が音楽を披露した。ふたりが演奏したのは、さすがに、パンクロックではないが、若者向けの曲で、良治が作曲したものだった。佐伯は、亜美の歌声の美しさに魅せられた。さすがに、プロを目指していただけのことはある。ふたりの曲が終わると、会場からは、大きな拍手が寄せられた。その間、小枝子が二人の子をひざに抱えていた。さすがに二人の血を引くだけのことはある。まだ、生まれたばかりというのに、曲にあわせて、身体を動かしている。

横で見ている、佐伯は子供は、どうしてこんなに可愛いのだろうと思った。小さい手を必死に動かしているのを見ていると、愛しいとおしさが募る。そして、ふと思った。かつては、こんな小さな子どもの前でも、タバコを平気で吸っていた時代があったのだ。特に、愚かな日本政府の政策のおかげで、喫煙率が八割を超えた時代もあった。その弊害がもうすぐやってくると言われている。そして、自分の健康のことを思った。喘息だけでなく、自分の肺は、かなり汚れているだろう。

## 明るい未来へ

佐伯は、社長室のドアをノックした。

「佐伯君か、入ってくれ」

すでに権藤が去って、半年が経過している。品川は、最初のころは戸惑いがあったようだ

が、いまでは、すっかり社長らしくなっている。

N T S にとっての懸案は、現在、国が保有している五〇%の株を、完全に市場に出し、実質的な民営化を果たすことである。権藤のおかげで、社のトップが役人の天下りといういびつな体制は解消されたが、いまだに、国の支配は続いている。思い切った方針を打ち出すためにも、できるだけ早い完全民営化が望ましい。

佐伯は、数日前に聞いた朗報を思い出していた。小枝子に子供ができたのだ。幸い、大学は完全禁煙であり、佐伯もタバコを吸わないから、おなかの子供に対する副流煙の心配はない。しかし、自分に子供ができてみると、佐伯は、前よりもタバコに対して神経質になっていた。小枝子が、電車に乗っていても、心配になる。駅のホームの喫煙所だ。喫煙者が固まりになってタバコを吸っているの、その煙の量が半端ではない。喫煙所の近くに車両があると、電車のドアが開いたときに、大量の副流煙が電車を襲う。それを小枝子が吸うと、おなかの子供に悪影響があるのではないかと心配になるのだ。場合によっては、流産の恐れもある。

佐伯は、できるだけ早い時期にN R と共同で、外に煙の漏れないような喫煙所の設置を実現しようと考えていた。最初は、N R も難色を示していたが、駅のキヨスクでのタバコの売り上げはばかにならない。しかし、ホームの喫煙場所に対しては、非喫煙者の乗客から、煙いという苦情が多く寄せられているらしい。N R も、一時は、ホームの完全禁煙を考えたが、タバコを売りながら、それを吸わせないというのでは、矛盾がある。結局、渋々ながらも、排煙設備の設置を検討することになった。もちろん、N T S も資金的な援助をする予定である。

権藤は、すべてのポストからリタイアした。その潔さは、見事というしかない。財産省からは、いくつかの財団の名誉職的なポストの打診があったらしい。名前だけ貸して、給料をもらうというものであるが、権藤は「もうそんな天下りは止めた方がいい」と諭したようだ。いま、国は未曾有の借金にあえいでいる。そんな無駄なポストを抱えている余裕はないはずだ。

権藤によると、そんな天下りを整理するだけで、国の無駄は二割以上削れるという。つまり、天下りを受け入れるためだけに存在する公益法人が数千以上もあるのだという。

先日、子供ができたことを報告方々、小枝子とふたりで、権藤のマンションを訪ねた。権藤は、プロはだしの手料理でもてなしてくれた。孫の誕生を本当に喜んでくれていた。「正直言って、小枝子は一生、結婚しないものとあきらめていた。こんなめでたいことはない」

そう言って、佐伯と祝杯を挙げた。小枝子は、アルコールは避けて、ウーロン茶で乾杯した。

## 禁煙活動家

佐伯は、品川の命を請けて、禁煙推進団体「タバコのない社会を実現する会」の事務局長である島崎隆二と会うことになった。もともと佐伯としても実現しなかった会合である。佐伯は、権藤のもとで働くうちに、敵と思われる連中とも意見交換する大切さを教わっていた。お互いに敵視しているだけでは、建設的な結果は得られない。互いの本音を語り合ってこそ打開策があるというものである。

当初はタバコ会社の常務と言うと、まったく相手にしてもらえなかったが、佐伯の粘り強い交渉で、ついには先方も折れてくれた。そして、会長とはいかなかったが、実施的な事務を取り仕切っている島崎と会う約束を取り付けたのである。ただし、会う場所は団体事務所やNTS本社ではなく、都内のホテルのロビーにある喫茶店ということになった。もちろん、全席禁煙の場所である。

事務局長の島崎は、約束の時間より一〇分ほど遅れてやってきた。島崎は、佐伯よりもわずかに歳上という印象であった。ネクタイはしていないが、きちんとブレザーを羽織っている。

「いや、お待たせして申し訳ない。ちょっと、急用ができたもので、遅れてしまいました」島崎は遅刻したことをわびた。

「とんでもありません。こちらがお願いしたことですし、私もつい今しがた来たばかりです」

島崎はどこか機嫌がいい。

「実は、佐伯さんには、悪いニュースかもしれないが、今朝がた、うちの事務所に朗報が飛び込んできたのです」

「ほうっ、それは何ですか」

「ついに、大手の日本無線がタクシーの全面禁煙化を宣言したのです」

佐伯は、なぜ島崎の機嫌がいいのかが分かった。一年ほどまえに、京都のタクシー会社が客商売の一環で、運転手の禁煙を宣言した。それも朗報ではあったが、狭いタクシー内では、一人でも喫煙すると嫌な匂いがこびりつく。乗客まで禁煙にしないと意味がないのである。ましてや、喫煙者の乗車した直後のタクシーなど悲惨である。日本無線は乗客にも禁煙を要求するという。

しかも、日本無線は運転手の採用条件に非喫煙を義務付けるという。というのも、運転手が喫煙者の場合、長時間、タバコなしでの運転は危険である。正確な判断ができなくなるからだ。当然、事故を起こす確率が高くなる。

「それは良かったですね」

佐伯がそう言うと、島崎は拍子抜けしたように佐伯を見ている。

「おたくには悪いニュースでしょう。困らないのですか」

佐伯は何事もなかったように

「いえ、そうは思いません。当社にとってもいいニュースと思っております」

島崎は、納得がいけないという顔をしている。

「島崎さん。実は、わたしもタバコが大の苦手です、タクシー内での喫煙には困っていたのです」

「佐伯さんも嫌煙派ですか？」

「はいそうです。それに、煙の害だけではなく。もし、タクシーの運転手が喫煙者の場合、喫煙できなかったために、イライラして事故を起こそうものなら、PL法によって、NTSに責任転嫁される恐れがあります」

「それは分かりますが、佐伯さん個人の立場と、NTSさんの立場は違うのではありませんか」

「おっしゃるとおりですが、当社では非喫煙者に迷惑のかからない社会の実現を社是として目指しています」

「なんか分かったような、分からないようなスローガンですな」

「そうでしょうか？」

「そうですよ。もし、非喫煙者の迷惑を考えるなら、最初からタバコを販売しなければいいじゃないですか」

佐伯は気づいていた。喫煙に反対する人たちの行き着く考えは常に同じである。喫煙を迷惑と考えるのならば、なぜ完全禁煙に移行しないかということである。

「それでは、逆にお聞きしますが、タバコはこの世から消えてなくなると思いませんか。」

「まあ、すぐには難しいでしょうが、二〇年後には、そうなっているかもしれません。いや、そうしなければいけません」

「それでは、島崎さんの希望通り、わが社がタバコ販売をやめたらどうなると思いませんか。」

「うーん」

島崎は悩んでいる。

「まあ、海外からタバコが入ってくるのでしょうか」

「その通りです。そして、それは、国益に反します」

「確かに、金の話が絡んでくると、急に議論がややこしくなります。大体、日本ではタバコ事業を財産省が管轄しているということ自体がおかしいのです」

と島崎は憤慨したように言っている。

「しかし、NTSさんはいったい何を考えているのですか。わたしと意見交換がしたいなどばかりです。お互い相容れない存在ですからな」

「実は、喫煙者と非喫煙者が共存共栄できる社会の実現。それが、われわれの目標です。」

「共存共栄？」

「ええ、共存共栄です」

「共存はどうか分かりませんが、共栄というのはどうでしょうか。いずれ、喫煙社会は衰退していくでしょうからな」

「それに関しては、いろいろと考えがあるでしょうから、ここで議論するつもりはありません。実は、本日、島崎さんにお伺いしたかったのは、嫌煙派という立場から、喫煙者が

気を使うべき点について意見を聞いたかったのです」

「喫煙者が気を使うべき点！なにを言っているんですか。喫煙そのものが大迷惑。その一語に尽きます」

「島崎さんの考えは分からなくもありませんが、最初から完全否定ではなく、少しお知恵を拝借できませんか」

「佐伯さんには申し訳ないが、タバコ会社の方に参考になるようなことはないと思いますよ」

「それでは、私の方からいくつかお聞きしますので、それにお答えいただけませんか」

「まあ、それならいいでしょう」

「ありがとうございます。それでは、お聞きしますが、最近、排煙設備の完備した喫煙所が増えていますが、これについては賛成ですか、反対ですか？」

「少し、難しい質問ですね。まず、私の立場からすると、あんなものに金をかけるくらいならば、いっそのこと禁煙にしてしまうべきだというのが本音です。しかし、タバコの煙にさんざん悩まされてきた立場から言わせてもらうと、喫煙者を隔離してもらうというのは大助かりです。さらに、排煙設備があるというのも重要ですな。排煙設備のない喫煙場所は、その回りが煙たくてしょうがありません」

「なるほど、よく分かりました。わが社では、今後も排煙設備の完備した喫煙所の整備を目指しております」

「まあ、民間会社のやることに文句はありませんが、いまだにおたくの株は半分以上が国の保有でしょう」

「おっしゃるとおりです。われわれとしては、完全民営化を目指しているのですが、思い通りになりません。それは、今後の大きな課題です」

国が半分以上の株を持っているということは、社の方針が国の政策によって、大きな影響を受けるということである。下手をすると、政治的駆け引きに利用される可能性もある。

「わたしが言いたいのは、半国有であるかぎり、喫煙所の整備にも税金が使われているのではないかという問題です」

「それは、頭の痛い問題ですね。もし、すべての喫煙所をわが社だけでまかなうとなると相当な出費を覚悟しなければなりません。また、その維持費が大変です」

「そうですね。排煙設備のメンテナンス。捨てられたタバコの始末。さらに、夏にはクーラーが、冬には暖房が必要でしょう。ちょっと考えただけで、大変な出費です」

「しかし、それが完備されれば、非喫煙者にとっても大きなメリットになるのではありませんか」

「確かに今はそうです。喫煙者にはマナーがありませんから、禁煙のサインがなければやりたい放題です」

「それでも、島崎さん。多くのひとは、禁煙のサインがあれば、吸わないということでしょう。それは、マナーがあるということではありませんか？」

「そう言われれば、そうかもしれません」

「前に塩谷先生からお聞きしたのですが、喫煙者はおきている間中、タバコを吸いたいというプレッシャーに苛まれているらしいのです。ですから、タバコが安心して吸える場所を提供さえすれば、かなりマナーという点でも向上すると思いますが」

「確かにそうかもしれませんが、もともとタバコを吸う連中には道徳心の欠如したものが多いのです。佐伯さんは、東京ミレニアムをご存知ですか？」

「ええ、有楽町駅の近くにある立派な展示場ですよ」

「あそこに広場があるのですが、これが喫煙者のたまり場ようになっていました。そこで、われわれが抗議して、広場を禁煙にしてもらいました」

「そうだったのですか」

「しかし、禁煙サインがあるにもかかわらずタバコを吸っている連中がいます」

「しかし、あそこには立派な喫煙所を設けたはずですが」

「もちろん、喫煙所で吸っている良識ある喫煙者もいます。しかし、禁煙地区にもかかわらず、タバコを吸っても警察に捕まるわけではないだろうと、平気で喫煙している連中も居るのです」

「そんなひとも居るのですか？」

佐伯は少し意外だった。排煙設備のある喫煙所さえ用意すれば、喫煙者はみなそちらで吸ってくれるだろうと思っていたが、どうやら、それは間違いだったようだ。

「やはり、罰則規定を設けないといけないということでしょうか」

「そうですよ。条例で路上喫煙を禁じているところでも、平気で吸っている人間がやまのようにいます。下手に注意すると逆切れされますからね」

と島崎はにがにがしそうに言った。おそらく、喫煙のことで、何度もトラブルになっているのだろう。佐伯は、路上禁煙を最初に宣言した千代田区のことを思い出していた。指導員は見るからに弱そうなひとたちである。それが、職務ということで、路上喫煙者に注意する。それが、蹴られたり殴られたりする。しかし、それを取材するテレビ局も禁煙反対であるから、一緒になって、指導員をいじめめる。指導員は、公務員でもなんでもなく弱い立場の人間であるが、それをみんなでいじめめるのである。マスコミの人間にとっては、法律を破ることは常識であり、しかも喫煙は当然の権利と思っているから、路上禁煙を取り締まる年寄りなど、蹴倒すのは当たり前なのであろう。しかし、佐伯は思っていた。なぜ、区長がみずから先頭に立って取り締まらないのか。

島崎は怒ったように言った。

「前にもうちの会員がひどい目に会いました」

「どんなことでしょうか」

「駅のホームでタバコを吸っている若い女に注意したのです。すると、その女は、注意したひとを痴漢呼ばわりして、駅員に突き出したのです」

「それは、ひどいですね」

「幸い、まわりのひとが事情を説明してくれたので事なきを得ましたが、目撃者がいなければ、大変な目にあっていたでしょう」

島崎は、喫煙に対して批判的であるので、すべての話を真に受けることはできないが、確かに、そのような事件は、佐伯も聞いたことがある。

「最近、若い女の子の喫煙が増えて、困ってしまいます。いったい、あの子らは何を考えているでしょうね」

確かに、NTSのデータでも、成人男子の喫煙率は下がっているが、女性の喫煙率は上昇傾向にある。タバコがダイエットに効果的だというような誤った考えによるものかもしれないが、愚かとしか言いようがない。

「ところで、島崎さんは、どうして嫌煙派になったのですか？」

島崎は、佐伯のこの質問に少しはにかんでいる。いったい、どういうことなのだろうか。

「佐伯さん。実は、愚かにも、わたしもヘビースモーカーだったのです」

と言って、島崎は恐縮している。

佐伯は納得した。実は、かつての喫煙者の方が、喫煙を辞めたとたんに、強烈なアンチスモーカーになると聞いたことがある。

「そうですか。それでは、何がきっかけでタバコを反対するようになったのですか」

島崎は、恥ずかしそうにこう言った。

「実は、わたしは、アマチュア界では結構有名なゴルファーだったのです。そして、恥ずかしながら、ゴルファーはみんなタバコを吸います」

「えっ、スポーツマンなのに、タバコを吸うのですか？」

「悪しき習癖としか言いようがないのですが、実は、かつては、有名なアメリカのゴルファーが喫煙者だったのです」

佐伯には驚きだった。スポーツマンは当然、喫煙しないものと思っていたからだ。

「それは、にわかには信じられませんが、誰ですか」

「例えば、ジャック・ニコラスです」

佐伯は驚いた。そんな人物が喫煙者だったのか。

「実は、ゴルフというのは紳士の娯楽とされていました。ですから、アメリカでは、葉巻を吸いながらプレーするというのがステータスと考えられていたのです。いまでも黒人のプレーを禁止しているコースもあるくらいですから、ひどい話です」

「でも、いまアメリカで一番人気のタイガーウッズは黒人ではなかったですか」

「ええ、タイ人とのハーフですが。ところが、ウッズでさえ、いまだに、アメリカでは肌の色だけでプレーできないゴルフコースがやまのようにあります」

「ひどいスポーツですね」

「そうですな」

「ところで、いまの話は島崎さんが嫌煙派になった理由と関係あるのですか」

「ええ、おおありです」

佐伯は、ゴルフと喫煙の話に興味を持った。

「佐伯さんは、日本人ゴルファーが世界で活躍できないという話を聞いたことはありませんか？」

「それは、あります。例えば、あれだけ、日本国内では無敵のコンコルド山崎が海外ではまったく勝てなかった。それが、不思議でしょうがなかったのです。最初は、あまりにもレベルが違いすぎるのかなとも思いました」

島崎は、頭を振りながら話した。

「理由は簡単です。日本人プロは、ほとんどがニコチン中毒だからです」

「えっ、あのコンコルド山崎がタバコを吸うんですか」

「ひどいもんですよ。日本では、マナー無視の非道さです」

「そうなんですか」

「もっと、困るのは、その悪影響を受けて、日本の若手ゴルファーがみんな喫煙することです」

佐伯には、にわかには信じられないことであった。

「いま、アメリカツアーに参加している角山をご存知ですか？」

「ええ、テレビコマーシャルにもよく出てきますよね。愛嬌のある顔で角ちゃんと呼ばれている彼ですよ」

「ええ、そうです。わたしが残念なのは、あのバカがヘビースモーカーということです」

「スポーツ選手としては、有り得ないことと思いますが」

「だから、日本人ゴルファーは海外で勝てないのですよ。ウッズは吸いません。もちろん、現在の一流選手は誰もタバコを吸いません。二流クラスには吸う連流がわんさと居ますが」そんなことがあるのだろうか。

「いちばんの現況はコンコルド山崎です。あいつは、全ゴルファーのあこがれでしたからね。そいつが、コースでタバコをどんどん吸うのですから、まわりの連中はタバコを吸えば自分も強くなると勘違いしたのでしょう」

「でも、本当に強かったですよね。無敵ではなかったですか」

「とんでもない。日本のゴルフは八百長ですよ」

「八百長！」

佐伯は驚いた。いったい、島崎は何を言うのだろうか。

「これは、なにもコンコルド山崎に限ったことではありません。古い日本のプロゴルファーすべてにあてはまることなんです」

佐伯は、島崎がいったい何を言い出すのだろうかと思った。

「かつて、プロゴルファーには、熱烈なシンパがいました。ファンというよりも宗教の信者のようなものです。こいつらは、常に大会に顔を出します」

佐伯は思った。どんなスポーツにでも熱狂的なファンは居る。それが、どうして八百長につながるのだろうか。

「この連中は、常に自分が覇を占めているプロゴルファーのラウンドについて周ります」

「ファンとしては、当然じゃないですか」

佐伯は当たり前のことを言った。

「ところが、ゴルフではそうではないので。」

「ただ見ているだけではないのですか」

「ひどいもんです。あいつらにはルールも何もありません。自分たちが応援しているゴルファーに勝たせたい。ただ、それだけです」

佐伯には意味が分からなかった。

「例えば、ボールがOBゾーンに入ります。すると、ファンが行って、ボールを蹴って、ラインの中に入れるのです。ラフに入れば、ボールのまわりをみんなで踏み固めます。さすがにテレビ中継のあるホールではやりませんが、予選会などでは当たり前でした」

「そんなことがあったのですか」

「ですから、日本人は、少々難しいところへボールが行っても、プレッシャーを感じずに済むのです。なにしろ、応援団がいますから」

佐伯には、にわかには信じられないことだった。ただし、思い当たることもなくはない。アメリカの大会で、コンコルド山崎がラフに入ったボールの後ろをドライバーで叩いて、有名選手から注意を受けたことがある。日本と同じ調子で、ついやったのかもしれない。

「しかし、それがタバコとどんな関係があるのですか」

「いいですか。タバコを吸うと、毛細血管の血流が停まります。緊張を強いられるショットでは、微妙かつ繊細なタッチが要求されますが、血流が停まったのでは、そんなコントロールはできません。しかも、一流のトーナメントでは、選手は常に緊張にさらされています。そして、タバコを吸いたいという渴望とも戦わなければなりません。いい成績を残せるわけがないのです」

「そういわれてみれば、そうですね」

「実は、ある大会に出ていたときに、同伴者から指摘を受けたのです。島崎さんは、緊張するショットの前では、タバコを吸うが、必ず失敗していると。最初は、私も、何をと思いましたが、言われてみれば、思い当たるふしがあります。そこで、いろいろな本を調べてみました。すると、それまで知らなかったタバコの害がどんどん出てきます。それで禁煙を決意しました。ただし、禁煙となると大変な苦勞をしました。結局、塩谷先生のお世話になって、三年がかりで禁煙に成功しました」

「島崎さんは塩谷先生のおかげで、禁煙に、成功したのですか。実は、以前に、塩谷先生のところには前社長と一緒におじゃましたことがあります」

「そうですか。よく塩谷先生はタバコ会社のひととあいましたね」

「実は、わが社の前社長も、大のタバコ嫌いだったのです。喫煙者と非喫煙者が共存できる社会の実現というのも、前社長の考えなのです」

「タバコ会社というのに、前社長も現常務もタバコが嫌いというのは変なところですね」

「ついでに言えば、現社長もタバコは苦手です」

そういと、島崎は、あきれたという顔をしている。

「しかし、島崎さんが、禁煙運動を始めるきっかけは何だったのですか」

「それは、無知がいかにおそろしいかということ、ゴルフを通して、身に染みだからです。わたしも、タバコを吸って居た頃は、その害をまったく知りませんでした。無視していたというのが本当かもしれません。しかし、いざ、禁煙してみると、それが、いかにひどいものかが分かりました。あの嫌な匂いはたまりませんし、煙による迷惑も大変なものです。ところが、日本ゴルフ協会は、いまだにゴルフ場での喫煙を認めています。相変わらず、日本のプロゴルファーも喫煙者だらけで、海外では勝てない」

「そういえば、女子は比較的活躍していますね」

「ええ、女子ゴルファーには喫煙者がほとんどいませんからね。それで、思い出しました。韓国女子があれだけ活躍しているのに、男はからっきしだめでしょう」

「そういえば、そうですね」

「実は、韓国の男子プロにも喫煙者が多いのです」

佐伯は、島崎の話の聞いているうちに、NTSが本当にタバコの販売を続けていいのだろうか疑問に思うようになった。いままでは、非喫煙者に迷惑さえかけなければ問題ないと思っていた。しかし、喫煙によって、スポーツ選手にまで悪影響が出ているとしたら、喫煙そのものが問題ということになる。喫煙は本人の自由とばかり言えなくなってしまうような気がした。

島崎は、佐伯が考え込んでいるのを見て、こう言った。

「とはいえ、佐伯さんが言うように、すぐに喫煙行為が無くなるわけではないでしょう。それに、私らがどんなに要求したところで、喫煙が法律で禁止されるということも、ここしばらくはないようです。とすれば、喫煙者と非喫煙者が共存できる社会の実現というのは、現実的な選択として、いちばんかもしれませんよ」

確かにそうである。しかし、佐伯の心は晴れなかった。タバコ会社の常務が、禁煙運動の活動家に励まされる。とても皮肉なことである。